

あの日、私は自分の意志で檻の扉を開けた。

今になって思えば、そうとしか言いようがない。脅されたわけでも、騙されたわけでもなかった。私はちゃんと自分の頭で考えて、自分の足で彼のオフィスへ向かい、自分の口で「承諾します」と言った。だから誰かのせいにすることも、あの選択を後悔することも、私にはできない。

黒崎総一郎。

その名前を初めて聞いたのは、父の口からだった。蒼白な顔をして、震える手で一枚の書類を差し出してきた父の姿を、私はたぶん一生忘れない。テーブルの上に広げられた書類には、私の想像をはるかに超えた数字が並んでいた。五千万。それが父の名前のそばに印字された借金の額だった。

怖かった。怖くないはずがない。相手は裏社会の帝王と呼ばれる男で、私はただの〇丁だった。毎朝満員電車で揺られて、可もなく不可もない仕

事をして、月末に給与明細を確認して一喜一憂する、どこにでもいるような女だった。そんな私が、東京の闇を束ねる男の前に一人で乗り込んでいたのだ。

でも、行くしかなかった。

父には他に頼れる人間がいなかったし、私にも他に選択肢がなかった。それだけのことだ。あのとき私は覚悟を決めていたつもりだったけれど、実際に最上階へ続くエレベーターの中に乗り込んだとき、心臓はうるさいほど鳴っていた。足は、正直に言えば、少し震えていた。

彼に初めて会ったのは、そのエレベーターを降りた瞬間のことだった。

黒崎総一郎は、私が思い描いていたどんな人間とも違っていた。怒鳴るわけでも、凄むわけでも、わかりやすく威圧してくるわけでもなかった。ただそこに立って、静かに私を見ていた。その目が、今でも忘れられない。

暗くて深くて、感情というものが最初から存在しないかのような目だった。それなのに、見つめられると不思議と逃げられなくなる。金縛りにあったように、私は彼の視線から目が離せなかった。

「俺の妻になれ。それで借金はなかったことにする」

彼はそう言った。低くて静かな声で、まるで天気の話でもするように。笑ってしまいそうになった。そんな話があるわけないと、一瞬本気でそう思った。でも彼の目は笑っていなかった。あの目は、最初から最後まで、ただの一度も笑わなかった。

私が承諾の返事をしたのは、翌朝のことだ。一晩かけて考えに考えて、それでも他の答えが見つからなくて、私は再びあのビルへ向かった。彼はすでに契約書を用意して待っていた。まるで私が必ず来ることを知っていたかのように。

今思えば、あのときからすでに、私は彼の手の中にあつたのかもしれない。

六ヶ月の契約だった。期間が終われば、私は自由になれるはずだった。でも今、私は彼の腕の中にいる。

それが嫌かと言えば、首を横に振るしかない。それどころか、今の私は、ここ以外の場所が想像できない。あの夜から半年が経って、私はいつの間にか、世界で一番入るのが怖かったはずの場所を、世界で一番安心できる場所だと感じるようになっていた。

どうしてこうなったのか、うまく説明できる自信はない。でも、話してみようと思う。全部、最初から。

あの日、私が自分の意志で扉を開けた、その瞬間から。

電話が鳴ったのは、金曜日の夜遅くのことだった。

残業を終えて帰宅したばかりで、私はコンビニで買ってきた弁当をテーブルに広げたところだった。画面に表示された「お父さん」の文字を見て、なんとなく嫌な予感がした。父から電話がかかってくること自体は珍しくないけれど、この時間に、というのが引かかった。父は早寝早起きの人間で、夜の十時を過ぎたら大抵もう寝ている。

「咲か。今、少しいいか」

電話口の父の声は、いつもとどこか違った。低く、かすれていて、何かを押し殺しているような響きがあった。

「どうしたの、こんな時間に」

「店に来てほしい。今すぐは無理でも、明日。明日の朝、早めに来てくれるか。話がある」

話がある、という言葉の重さが、受話器越しでも伝わってきた。私は弁当のふたを閉めて、「わかった、行く」と答えた。

翌朝、父の小料理屋「咲花」に着いたのは、開店前の九時ごろだった。店の前には準備中の札が下がったままで、ガラス越しに父の後ろ姿が見えた。私が引き戸を開けて入ると、父は振り返り、それから少しだけ視線を落とした。その一瞬で、私は覚悟を決めた。良い話ではない、と体が先に理解した。

テーブルに座った父が差し出してきたのは、一枚の書類だった。

「これを見てくれ」

受け取って、目を走らせる。最初は何が書いてあるのかよくわからなかった。法律用語のような言葉が並んでいて、私の読解が追いつかなくて、でも中ほどまで読んだところで、ある数字が目飛び込んできた。

五千万円。

「お父さん、これ」

「借金だ」

父は静かに言った。テーブルの上で両手を組んで、まっすぐ前を向いたまま、ゆっくりと話してくれた。十五年前、店が一番苦しかった時期に、当時の黒崎組の先代からまとまった金を借りたのだという。利子の取り決りもなく、「困ったときに返してくれば構わない」という口約束だったそうで、父はそのまま長年にわたって少しずつ返済を続けていたらしい。しかし先代が亡くなり、組織の代替わりが起きて、先日になって突然、残債の一括返済を求める書面が届いた。

「幾ら返したの、今まで」

「全部合わせれば千五百万ほどにはなる。でも利子が膨らんでいて、元

本はほとんど減っていないそうだ」

「そんな。利子の取り決めはなかったんじゃないの」

「口約束だからな。書面がない。先代はもういない。今の組には、俺の言い分を聞いてくれる人間がいないんだ」

父の声は静かだったけれど、その静けさが逆に痛かった。この人は怒鳴ったり泣いたりするのが下手だから、こういうときほど声が低くなる。私が小さいころからそうだった。

「返済期限は」

「一週間後だそうだ。払えない場合は、店も家も差し押さえると書いてある。最悪の場合は、俺自身が働いて返すことになる、と」

「働いて、って」

言葉の意味がわかった瞬間、背筋が冷えた。黒崎組が「働いて返せ」と

言うとき、それが何を指しているかは、わざわざ説明されなくてもわかる。

「咲、俺はもう歳だし、腰も悪い。店だってそんなに長くは続けられないと思っていた。だから別にそれでも構わないんだが」

「構わないわけではないでしょう」

思わず声が出た。父は少し目を丸くして、それからまた視線を落とした。

「なんとかする」と私は言った。自分でも根拠がどこにあるのかわからなかったけれど、それ以外の言葉が出てこなかった。「なんとかするからお父さんは何もしないで」

店を出て、路地に立って、スマートフォンで「黒崎組」と検索した。

出てきた情報は断片的で、どれが本当かわからないものばかりだったけれど、いくつかの記事に共通して登場する名前があった。黒崎総一郎。現組長。三十四歳。表向きは不動産と飲食業を束ねる「黒崎ホールディング

ス」の代表取締役。関東最大規模の半グレ組織と呼ばれ、警察との繋がりも噂される。

写真は一枚も出てこなかった。

それでも私は、住所として掲載されていた都心のビルの名前をメモした。行くしかない、と思った。交渉できるかどうかなんてわからない。会ってもらえるかどうかともわからない。でも何もしないまま一週間が過ぎるよりは、動いた方がいい。

翌月曜日の昼休み、私は会社を抜け出して、そのビルの前に立った。

「黒崎ホールディングス」という金色の文字が、エントランスの壁に端正な書体で刻まれていた。自動ドアの向こうには広いロビーがあつて、制服姿の受付スタッフが二人、こちらを見ていた。スーツ姿のビジネスマンが何人も行き交っていて、一見するとごく普通のオフィスビルにしか見え

ない。でもその整然とした空気の中に、何か別のものが混じっているような感じがした。上手く言えないけれど、息が少し重かった。

意を決して中に入り、受付カウンターへ向かった。

「黒崎総一郎社長にお会いしたいんですが」

スタッフの一人が、表情を変えずに私を見た。

「ご予約はございますか」

「ないです。でも、どうしても直接お話したいことがあって」

「申し訳ございませんが、アポイントのない方はご案内できかねます。

よろしければ、担当部署へのお取り次ぎを」

「担当部署じゃなくて、社長本人に話があるんです。黒崎組への借金についての相談で」

スタッフの目が、一瞬だけ動いた。表情は変わらなかったけれど、「黒崎

組」という言葉に何かが反応したのがわかった。もう一人のスタッフが静かに席を立ち、奥へ向かった。

私は待った。ロビーの空調の音だけが、やけにはっきり聞こえた。しばらくして、奥から黒いスーツの男が現れた。三十前後に見える、がっしりとした体格の男で、笑顔は貼り付けたように整っていた。

「ご用件は伺っております。ただ、社長への直接のお取り次ぎはいたしかねます。借金に関するご相談であれば、担当の者が」

「お断りします」

自分でも驚くほどはつきりした声が出た。男が少し目を細めた。

「直接話したいんです。黒崎総一郎さんに。それだけです」

「お嬢さん、ここがどういう場所か、ご存知ですか」

「知っています。それでも来ました」

沈黙が数秒続いた。男が何かを言おうとした、そのとき、背後でエレベーターのチャイムが鳴った。

振り返ったのは、無意識だった。

ドアが開いて、最初に入ったのはスーツの袖だった。濃紺の、仕立ての良い布地。それからゆっくりと視線を上げて、私は息をのんだ。

長身だった。おそらく百八十五センチ以上ある。肩幅が広く、細身なのに圧迫感がある体つき。黒髪は短く整えられていて、顔立ちは彫りが深く整っていた。でも何より目を引いたのは、その目だった。暗くて、静かで、感情の底が見えない目。こちらを見ているのに、何も映していないような。

男が一言、言った。

「連れてこい」

低くて静かな声だった。受付スタッフも、黒いスーツの男も、何も言わ

ずに動いた。私は気づいたら、その人の後ろについてエレベーターに乗っていた。

最上階のボタンが押された。

扉が閉まる。密閉された空間の中で、私は正面の鏡を見つめながら、心臓の音を数えた。隣に立つ男は無言だった。こちらを見ていなかった。でも、存在感だけがやけに大きくて、息をするのが少し難しかった。

扉が開いて、案内されたのは広い個室だった。窓の外に東京の街が広がっていて、低い空に薄い雲がかかっていた。無駄のない家具。デスクと、向かい合わせに置かれたソファ。余計なものが何もない部屋だった。

「座れ」

促されてソファに腰を下ろす。男はデスクには近づかず、窓の前に立つたまま、私を見た。

「名前」

「瀬名咲と言います。父が黒崎組に借金があつて、その件で」

「瀬名健造の娘か」

一瞬、言葉に詰まった。父の名前を知っている。それだけで、この人がこの件を把握していることがわかった。

「そうです。一週間以内に五千万を返済しろと書面が届いていて、それは無理なので、せめて分割にしてもらえないかと相談に来ました」

できるだけはつきり言おうと思つていた。下手に出ても、感情的になつても、どちらも良い結果を生まない気がした。だから私は自分なりに整理した言葉を並べた。

男は黙つて聞いていた。私が話し終えても、すぐには口を開かなかつた。ただ、あの暗い目でこちらを見ていた。まるで品定めをするように。その

視線がひどく居心地悪くて、私は膝の上で手をきつく握った。

「分割払いをしてほしい、というのが要望か」

「はい」

「断る」

短かった。感情が一切ない声だった。

「なぜですか」

「必要がないからだ」

「必要がない、というのは」

「別の話がある」

男はそう言って、初めて私のそばへ歩み寄ってきた。ソファの前に立って、見下ろしてくる。その距離が縮まるほど、圧迫感が増した。逃げ出さなかったけれど、逃げたら何かが終わる気がして、私は動かなかった。

「俺の妻になれ。それで借金はなかったことにする」

静かな声だった。怒鳴るわけでも、脅すわけでも、ましてや笑うわけでもない。本当に、ただそう言った。

私はしばらく、言葉の意味を処理できなかった。

「……妻、ですか」

「そうだ」

「それは、どういう」

「言葉通りだ。書類上の妻でいい。期間は最短六ヶ月。その間、父親への危害は加えない。生活費と住居はこちらで負担する。条件はそれだけだ」
淡々としていた。まるで契約の条項を読み上げるように。

「なぜそんなことを」

「必要だからだ」

「それだけですか」

「それだけだ」

私は彼を見上げた。この距離で見ると、改めてその目が不思議だと思った。暗くて、深くて、何を考えているのか全くわからない。でも嘘をついているようには見えなかった。少なくとも、この人はいま本気でそれを行っている。

「一晩、考えさせてください」

そう言うのと、男は少しだけ間を置いた後、「明日の午前中に返事を持ってこい」と言った。

私は立ち上がり、頭を下げて、部屋を出た。エレベーターを待ちながら、ようやく気づいた。名前を聞いていなかったわけじゃない。確かめるまでもなかった。あの目を持つ人間は、この世界にあの人しかない。

黒崎総一郎。

帰りの電車の中で、私はずっと窓の外を見ていた。考えていた。妻になる、という言葉の重さを、何度も何度も頭の中で転がした。六ヶ月。書類上だけ。父は守られる。店も家も残る。私が必要なのはただ名前を貸すことだけで、それだけで五千万の借金が消える。

おかしい話だとわかっていた。怪しいとも思っていた。でも、あの目に嘘の色はなかった。そして私には、他に選択肢がなかった。

その夜、私はほとんど眠れなかった。布団の中で天井を見上げながら、考え続けた。父の顔を思い出した。テーブルの前で静かに手を組んでいた、あの後ろ姿を。あの人が「構わない」と言えるはずがない。あの店は父の全てで、その店を守るために母が死ぬまで働いていたことを、私はちゃんと知っている。

夜明けごろ、私は決めた。

翌朝、身支度を整えて、再びあのビルへ向かった。受付で名前を告げると、今度はすぐに案内された。昨日と同じ部屋に入ると、デスクの上に書類が置かれていた。男はすでにそこにいて、私が入ってきてても立ち上がりもしなかった。

「返事を聞こう」

「承諾します」

短く答えた。男はひとつ頷いて、デスクの上の書類を私のほうへ滑らせた。契約書だった。細かい字でびっしりと条件が書かれていて、私は一行ずつ読んでいった。

期間は署名日から六ヶ月。その間、咲は黒崎総一郎の妻として行動する義務を負う。住居は黒崎の私邸とする。生活に必要な費用は全額黒崎側が

負担する。瀬名健造への一切の請求は本契約の締結をもって消滅する。

読み終えて、ペンを手に取った。

署名欄に自分の名前を書きながら、手が少し震えているのがわかった。でも文字は乱れなかった。書き終えて顔を上げると、男が私を見ていた。

それから男はゆっくりと立ち上がり、デスクを回り込んで私のそばへ来た。私が思わず一步下がると、男の手が伸びてきて、顎の下に触れた。強くはなかった。でも逃げられない角度だった。顔を上に向けさせられて、あの暗い目と正面から向き合う。

「後悔するなよ」

低い声が、静かな部屋に落ちた。

私はその目を見返しながら、はつきりと答えた。

「しません」

男の目が、ほんのわずかだけ、動いた気がした。

引越しは、翌々日に行われた。

私物をまとめるのに一日もかからなかった。もともと物が少ない部屋だったし、「必要なものは全て用意してある」と言われていたので、持っているのは衣類と、本と、母の形見の小さなブローチだけにした。段ボール箱が三つ。それが二十五年分の私の荷物だった。

迎えに来たのは、黒いスーツを着た無口な男だった。黒崎の部下らしく、私に対して丁寧ではあったけれど、余計な言葉は一切なかった。マンションの前に停まっていた車は、私がこれまで乗ったことのない種類のもので、シート革の匂いが鼻についた。

車窓から流れていく街並みを眺めながら、私はこれからのことを考えよ

うとして、うまく考えられなかった。怖いのか不安なのか、それとも別の何かなのか、自分の感情がよく整理できなかった。ただ、もう引き返せないということだけはわかっていた。

黒崎の私邸は、港区の高台にあった。

坂道を上って鉄の門をくぐると、欧州の古い館を思わせる二階建ての建物が現れた。白い外壁に蔦が絡んでいて、手入れされた庭には季節の草花が植わっていた。広さだけでいえば、父の店と自宅を合わせたよりずっと大きい。私は車から降りながら、なんとなく現実感が薄れるのを感じた。

玄関で出迎えたのは、家政婦の田中さんという六十代の女性だった。物腰が柔らかく、「お待ちしておりました、奥様」と言われたときだけ、少しだけ心拍が上がった。奥様、という呼び方に、まだ慣れていない。

案内されたのは、母屋とは渡り廊下で繋がった別棟の部屋だった。ゲス

ト用の部屋だと説明されたが、私がこれまで暮らしてきたマンションの部屋より広く、調度品も全て上等だった。ベッドが大きくて、窓からは庭が見えた。クローゼットを開けると、私のサイズに合わせたらしい衣類がすでに並んでいた。

「ご不便なことがあれば何でも声をかけてください」と田中さんは言つて、下がっていった。

一人になった部屋で、私はベッドの端に腰かけて、窓の外を見た。庭の向こうに東京の街が見えた。空は曇っていた。

黒崎総一郎は、その日、家にいなかった。

夕食は一人でとった。田中さんが丁寧に準備してくれた食事は、品数も味も申し分なかったけれど、広いダイニングに一人でいると、音が少なすぎてかえって落ち着かなかった。箸を置いてから、部屋に戻るまでのあい

だに、この家に自分がいることの不自然さをじつくりと感じた。

翌日も、その翌日も、黒崎はほとんど家にいなかった。

顔を合わせるのは夕食のときだけで、それも毎日ではなかった。向かいに座っても会話はほぼなく、私が「今日はどちらへ」などと聞いても、短い返事が返ってくるだけだった。「仕事だ」とか「必要ない」とか、そういう類の言葉。食事が終われば彼は席を立ち、私は残された食器を眺めた。

これが六ヶ月続くのか、と思った。

特に辛いわけではなかった。ただ、何もすることがなかった。本を読んだり、庭を散歩したり、田中さんに料理を手伝わせてもらったりして時間を潰した。元の職場には一身上の都合で退職すると伝えてあった。親友の奈緒には「事情があつて少しの間連絡できないかもしれない」とだけ送った。奈緒からは「何があつたの!？」と既読がついて五秒後に返信が来た

けれど、それには「落ち着いたら話す」とだけ返した。

三日目の夜、夕食の席に黒崎が珍しく定刻に現れた。

いつもと変わらない無表情で向かいに座り、田中さんが料理を並べて下がっていくのを待った後、食事を始めた。私も箸を取った。沈黙。食器の音だけが続く。私は窓の外の庭を眺めながら、この沈黙にも少しずつ慣れてきたかもしれない、などとぼんやり考えていた。

食事が終わりに差し掛かったころ、黒崎が口を開いた。

「今夜、俺の部屋に来い」

箸を持つ手が、止まった。

「……それは、契約書には」

「書いていない。そうだな」

「書いていないということは、含まれていない条件だと思っていたんで

すが」

「お前は俺の妻として振る舞うことになっている。閨を共にするのはその一部だ」

「一部、という解釈は」

「俺の解釈だ」

短く、静かだった。反論の余地を与えない言い方ではあったけれど、どこかの言葉のように強引でもなかった。ただ、そういうものだ、という口調だった。

私は少しのあいだ黙っていた。怒りがないわけではなかった。でも、ここで感情的になって何かが変わるとも思えなかった。それに、この人が本当に強引に出るつもりなら、私にできることはあまりない。

「嫌なら」と彼が続けた。「父親の借金を今すぐ返済してもらう」

それだけで十分だった。私には選択肢がなかった。最初からそうだったし、今もそうだった。

「……わかりました」

短く答えて、箸を置いた。黒崎は私を見て、何も言わなかった。

夜が深くなつてから、私は彼の部屋の前に立った。

ノックをすると、すぐに「入れ」という声が返ってきた。

ドアを開けた先は、想像していたよりずっと静かな部屋だった。重厚な木製の家具が並んでいて、暖色の照明が低く灯っていた。窓のカーテンは引かれていて、外の音は全て遮断されていた。広いベッドが部屋の中央に置かれていて、その手前に黒崎が立っていた。上着を脱いで、シャツの袖をまくっていた。その姿が、なぜかひどく現実的で、私は思わず目を逸ら

した。

「こっちに来い」

言われた通りに近づいた。足が重かった。心臓が鳴っていた。緊張している自分が情けなかったけれど、どうにもならなかった。

彼の手が、私の頬に触れた。

触れ方が、思っていたのと違った。粗くなかった。ゆっくりと、私の顔を掌で包むようにして、親指が頬骨のあたりをなぞった。その温度が思いがけず温かくて、身体が勝手に強張った。

「震えているな」

「……震えていません」

「嘘をつくな」

低く、静かだった。責めているわけではなかった。ただ事実を言ってい

るような声で、それがかえって恥ずかしかった。

彼の手が私の髪に触れ、ゆっくりと後ろへ流した。うなじが露わになって、そこに唇が降りてきた。温かい感触が首筋をゆっくりと這い、鎖骨のほうへ降りていく。私は息をのんだ。呼吸の仕方がわからなくなった。

ブラウスのボタンが一つずつ外されていった。急がなかった。丁寧だった。脱がされて、下着だけになった自分の姿を直視できなくて、私は視線を宙に向けた。黒崎の手が背中に回り、ホックが外れた。

「見ろ」

「……え」

「俺を見ろ」

低い命令だった。視線を向けると、黒崎がじっと私を見ていた。あの暗い目が、この距離にある。逃げられなかった。

彼の唇が、鎖骨から胸元へと降りていった。乳首に唇が触れた瞬間、私の喉から小さな声が漏れた。舌先でゆっくりと転がされ、吸い上げられる。もう一方を指先で摘まみ上げられて、私は思わず彼の肩に手を置いた。縫うような形になってしまつて、恥ずかしかったけれど、体が言うことを聞かなかった。

「ん……っ、」

「声を我慢するな」

囁かれた言葉に、余計に恥ずかしくなった。でも彼は構わず続けた。両方の乳首を交互に責めながら、片方の手が腹部へ降り、スカートの中へ入ってきた。

「や、」

「力を抜け」

有無を言わさない声だった。ショーツの上から触れられて、私は息を詰めた。そこがもうひどく熱くなっていることを、彼の指が確認するように動いた瞬間、頭の中が真っ白になった。

「……濡れている」

耳元で囁かれて、羞恥で死にたくなった。

「ちが、そういうわけじゃ」

「どういうわけだ」

答えられなかった。ショーツが引き下ろされて、今度は直接触れてくる。秘所の割れ目に沿って指が動き、蜜をまき散らすようにゆっくりとなぞられた。

「あ……っ♡」

「声が出た」

低い声が、どこか満足げだった。指がクリトリスのあたりを見つけて、円を描くように動き始めた。じわじわと、焦らすように。私の腰が勝手に揺れた。

「ん、んっ……♡　そこ、」

「ここか」

「あっ……♡　待って、」

待ってくれなかった。指の動きが少しだけ速くなって、私は彼の肩にしがみついた。膝の力が抜けそうだった。クリトリスを押し上げるようにして弾かれるたびに、腰の奥からじんじんとした熱が広がってくる。

ベッドに押し倒された。シーツが冷たくて、自分の体温がその分高く感じた。黒崎が覆い被さってくる。この男の体が大きいことを、今更ながら実感した。

彼の指が、今度は中へ入ってきた。

「あっ……っ♡」

ゆっくりと、奥まで沈んでいく。一本では物足りないとしても言うように、すぐに二本になった。折り曲げるようにして動かされ、私はシーツを掴んだ。

「んっ、あ……っ♡ ん、」

「ここが気持ちいいか」

「……っ、言わ、」

「言わなくてもわかる」

低い声でそう言いながら、指の動きが深くなった。奥のざらりとした場所を繰り返し押されて、私は声を抑えることを諦めた。

「あっ♡ あ、そこ……っ♡ んん、」

濡れた音が静かな部屋に広がっていくのが聞こえて、また恥ずかしくなった。でも彼は止めなかった。指を動かしながら、親指でクリトリスも同時に押さえてくる。二カ所を同時に責められて、私の頭の中から余計な考えが全部消えた。

「や……っ♡ だめ、これ、だめ……っ♡」

「イけそうか」

「……っ♡ ん、あ、」

「声を聞かせろ」

「あっ♡ あああ……っ♡」

波が来た。指の動きに合わせて腰が跳ねて、私はシーツをぐしゃりと握りしめたまま、長い呼吸ができなくなった。余韻がじりじりと尾を引いて、ようやく力が抜けた頃には、全身がひどく脱力していた。

黒崎が指を引き抜いて、私の上に覆い被さった。

視線が合った。あの暗い目が、今は少し違って見えた。相変わらず感情が読めないけれど、何か熱のようなものが底の方にある気がした。

「続けるぞ」

私は頷いた。

彼が中へ入ってきた瞬間、私は息をのんだ。大きかった。奥まで埋められた感覚に、思わず声が漏れた。

「あ……っ♡ん、」

「力を抜け」

「わかって……っ、でも、」

彼がゆっくりと動き始めた。最初は深く、ゆっくりと。私の息が乱れるのを確かめるように、一度動かたびに少し止めて、また動く。その焦らす

ような律動に、私はすぐにまた追い詰められた。

「んっ……っ♡ あ、ん、」

腰の奥から熱が広がってくる。さっきとは違う感覚だった。指で達したときとは質が違う、もっと深いところから来る何かが、じわじわと積み上がっていく。

「あっ♡ あっ♡ ん、」

黒崎の動きが少しずつ速くなった。深くなった。私の腿を持ち上げて、角度を変えてくる。その角度で奥をつかれると、自分でも驚くほど大きな声が出た。

「あっ♡ そこ、そこ……っ♡ ん、あ、」

「ここか」

「……っ♡ ん、んん、」

繰り返し同じ場所を責められて、私の視界がじわりと滲んだ。泣いてい
るわけじゃなかった。でも目が潤んで、天井がぼやけた。

「あっ♡ あ……っ♡ だめ、また、」

「いい」

低い声が耳元に落ちた。その声がトリガーになったみたいに、私の体が
弾けた。

「あっあっあ……っ♡♡」

腰が浮いた。全身が震えた。余韻が長かった。黒崎がゆつくりと動きを
緩めながら、それでも奥まで繋がったまま、私が落ち着くのを待っていた。

やがて彼も低く息を吐いて、静かになった。

しばらく、どちらにも何も言わなかった。

天井を見上げたまま呼吸を整えていると、黒崎がゆつくりと体を離れた。

私の髪をひとすじ、耳の後ろへ流した。その手つきが、また不思議なほど丁寧だった。

「……きれいだな」

低い声が、静かな部屋に落ちた。

私は一瞬、聞き間違えたと思った。もう一度確かめようとしたけれど、黒崎はそれきり何も言わなかった。ただ静かに横を向いて、目を閉じた。

私はベッドの上で上体を起こして、乱れた服を直した。それから立ち上がり、ドアに向かった。

廊下に出て、扉が閉まった瞬間、深く息を吸った。

これは契約だ、と思った。感情を持つてはいけない。期待してはいけない。あの言葉は、聞き間違いだったのかもしれない。そうじゃなくても、意味はない。この人は私を妻として「利用」しているだけで、それ以上で

も以下でもないのだから。

自分にそう言い聞かせながら、別棟への渡り廊下を歩いた。
夜の庭に、風が吹いていた